

肺検診の重要性

—COPDパート1—

国立病院機構和歌山病院

院長 南方良章

本シリーズは肺検診の重要性を結核、肺癌、COPDの3つの病気をとお話してまいります。今回は3つ目の病気である「COPD」について「パート1」です。COPDは慢性閉塞性肺疾患という病気ですが、あまり耳慣れないと思います。COPDの死亡者数の推移は、全国的に増加しています。グラフを示しますが、和歌山県はCOPDでの死亡が都道府県別で第1位です。以前は肺炎、あるいは慢性気管支炎と呼ばれていました。肺は正常ではスポンジのような断面をしており、スポンジの一つひとつの穴が非常に小さいですが、COPDでは肺が壊れて空気の穴がはつきりと見えてしまうほど大きくなります。この状態になると酸素の交換がうまくいけなくなりま

るなどの呼吸器の症状が一般的に見られます。中年の方で喫煙歴があり咳痰、息切れの症状がある方は、それだけでCOPDを疑います。健康な人でも年齢を重ねると肺の働きが落ちてきます。わたしたちは、日々、呼吸することによっていろいろなものを吸い込みながら生活しているため、肺がだんだん痛んでいきます。老化と考えると良いでしょう。肺の働きが悪くなるとうつらな生活が不自由になり、さらに、悪くなると生命を維持出来なくなりま

す。肺の機能が正常な人でも年齢を重ねると生活が不自由になるくらいには、肺の働きが落ちてきます。ただし、その年齢は通常150歳ぐらいで寿命より長い問題になりません。タバコを吸っている人は、急速に肺の働きが落ちてくる場合が多いので寿命より先にCOPDで命を落とすことになりま

す。例えば、45歳でタバコを止めたとしても、肺がんでも喫煙指数(フリックマン指数)で400から500と高い人は、癌の危険性はあきらかに高いので、止めることでその危険性は減っていきます。しかし、COPDに関しては今止めるのと10年後に止めるのでは、呼吸困難となる時期をどれほど先延ばしにできるのかを意味します。このCOPDという病気に関しては、タバコは1日でも早く止めた方が良いのです。COPDは厚生労働省が調査したところ、日本では22万人ぐらいの患者がいると言われていま

す。しかし、他の機関が全国調査したところ、500万人以上のCOPD患者がいるとの結果が発表された。これにより、ほとんどの人が診断されていないことがわかります。なぜ、これほど多く人数の違いがでたのでしょうか。考えられる理由としては、「息切れるのは年をとったからだ」とか、「咳が出るのはタバコを吸っているからだ」と自分を納得させて病気がとれないからです。もう一つはCOPDは慢性的(急激に悪化しない)で治らないのだと間違った認識があったからです。最近では、治療薬が開発され薬物投与でも症状が良くなります。壊れた部分は取りませんが、それ以上の進行を抑えることができる可能性もあります。少なくとも禁煙するだけで寿命を伸ばし日常生活も良くなる

ことが出来ます。しかし、大部分のCOPDの人は、病気が認識していないため、「別にいいや」となってしまう、禁煙の意識が芽生えないと言えるのでしよう。医療者は、この意識をなんとか変えなければならぬのです。どのようにして意識を高めるか知恵を絞る必要があります。今回は「COPD」について「パート2」のお話をします。

本文は、2014年11月22日に行われた第9回国立病院機構和歌山病院市民公開講座の内容を編集し掲載しています。

や痰が多い、息切れがす

COPDの症状は、咳

値が1秒率とい

他の疾患を除外する必要

延ばしにできるのかを意

味します。このCOPD